

研究代表者 所属・職：健康科学部・助教

氏 名：坂口 大史

研究課題名：半田市亀崎エリア及び中心市街地における防災型まちづくりに関する実践的研究

取り組み状況

本研究では、住民参加型の防災ワークショップを開催することにより、地域の特性を把握し、災害弱者の居住場所、救援者の指定、危険区域の指定、複数の避難経路、避難施設利用計画などを防災マップに視覚的にまとめることを第一の目的として研究を行った。さらに、防災活動や市街地活性化に関わる住民主体の地域活動を継続的に行う仕組みづくりの構築に取り組むことを本研究の目的として研究を行った。

これらの目的における本研究の取り組みについて、以下①住民参加型ワークショップの開催、②防災マップの作成、③住民主体の地域活動を継続的に行う仕組みづくりについて取り組み状況を報告する。

① 住民参加型ワークショップの開催

半田市及び半田社会福祉協議会と連携して、亀崎・有脇地区の住民を対象として、(i)2016年8月31日「ふくし井戸端会議-DIGによる災害リスクの見える化」、(ii)2017年1月10日「ふくし井戸端会議-HUGによる避難所運営シミュレーション」の2つの住民参加型防災ワークショップを開催した。具体的には2016年8月31日は Disaster Imagination Game(DIG)を実施し、亀崎・有脇地区の災害時のリスクを見える化すると共に、各地域で災害時の避難経路及び避難施設についてのシミュレーションを行った。続いて、2017年1月10日は Hinanjoy Unei Game(HUG)を実施し、亀崎中学校を想定避難所として避難所の運営シミュレーションを行った。

② 防災マップの作成

住民参加型ワークショップ中に取り組んだ内容からマップを作成した。(i)(ii)から、亀崎と有脇の両地区において、要救援者の住まいとそこからの避難経路及び避難場所を議論し、危険区域なども

合わせてマップ化した。また、災害時の避難所運営において想定される問題点や課題を列記してまとめた。

③ 住民主体の地域活動を継続的に行う仕組みづくり

2017年1月26日に亀崎中学校にて、「ふくし共育」と題して地域活動を行った。これらは、①で取り組んだワークショップの内容を地域の子供に伝えていくと共に、継続的な地域活動を行っていくきっかけとして地域の住民がリーダーとなり、中学生と共に HUG を実施した。

研究成果の内容

本研究の本年度での主な成果は以下の3点である。

① 地域防災計画策定に関わる基礎的な知見の蓄積

住民参加型のワークショップに基づいた防災マップを作成したことで、住民からみた危険区域やハザードマップには表示しきれない詳細箇所もマップ化するなど、今後半田市における地域防災計画を発展させていく上での貴重な資料にもなると考えられる。

② 官(市)・学(大学)・民(地域)の協力関係の構築

本研究における住民参加型ワークショップ及び地域活動に取り組む際、該当地域の住民参加のみならず、半田市役所及び半田社会福祉協議会のメンバー、本学からは教員及び学生メンバーが密に連携して活動を行った。これら官・学・民による一体的な取り組みは、災害発生時の対応及び復旧段階において必要不可欠なものであると考えられる。よって、本研究によって構築した横断的な協力関係を今後も維持し、継続的な活動に繋げていくことが期待される。

③ 住民主体の地域活動の実施と継続的な活動の きっかけづくり

防災型まちづくりにおいて、住民主体の地域活動が鍵になるため、住民を地元の行政と大学がサポートしながら活動を行っていく仕組みを構築する必要性が指摘される。これらの点から、本研究で実施した「ふくし共育」をきっかけとして、それらに関連する活動を地域において定期的に実施していくことが重要である。これら定期的かつ継続的な活動によって、住民の防災に対する意識の向上に加えて、実際の災害発生時に円滑な対応を行うことが可能になる。